安部公房全作品

15

新潮社

安部公房全作品15
定価 700円

印　刷　昭和48年7月15日
発　行　昭和48年7月20日
著　者　安部公房（あべこうぼう）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
振替 東京803　電話(03)260-1111
印刷所　大日本印刷株式会社　製本所　大口製本
© 1973, Kōbō Abe, Printed in Japan
乱丁，落丁本はおとりかえいたします。

安部公房全作品 15 目次

内なる辺境　7

I

消しゴムで書く　61
一寸後は闇　68
周辺思考　70
実験美学ノート　76
ヘテロの構造　81
旅へのいざない　83
枯尾花の時代　85
因果律　87
委託殺人　90
私の書きたい女　92
便器にまたがった思想　94
ゴドーも来ない場所　96
白鳥殺しの歌　99
独創と普遍　101
批評的怪談　104
仮説の文学　106
SFの流行について　108
都市について　117
被告席から　120
種のない話　128
リルケ　151
ミラーとの手紙　154
「今日」をさぐる執念　156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

幕末・維新の人々 158
作者と作品との関係 160
モチーフの発見 162
『砂の女』の舞台 163
無名性——出発のための前提 165
玩具箱 166
師と私と——石川淳氏 167
巻貝の文学 169
石川淳『至福千年』 179
最近の大江健三郎 180
怖い穴ぼこ 182

II

映像は言語の壁を破壊するか 187
モンローの逆説 191
危機を直視せよ 193
笑劇のエネルギー 199
演出家の錯覚 205
ミュージカルスの反省 211
饒舌の再発見 216
演劇万年筆論 222
アヴァンギャルド 232
現代演劇の進路 237
時をたがやす 240

十三年目の……　241
実験映画のシナリオ　243
松浦竹夫　247
東松照明　251
映画「憂国」のはらむ問題　255
映画「時の崖」について　257

Ⅲ

不眠症とテロリスト　261
ぜんぶ本当の話　262
現代恐怖物語　264
落第のすすめ　266
モスクワとニューヨーク　267
羽田空港　272
局外者の発言　276
現代のヒーロー　279
孤独な熱狂　291
多摩丘陵のドライブ　293

安部公房全作品

15

内なる辺境

《目次》

ミリタリィ・ルック
異端のパスポート
内なる辺境

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ミリタリィ・ルック

べつに、すべての軍服が、ファシズムに結びつくなどと思っているわけではない。

しかし、あらゆる軍服の歴史を通じて、やはりナチス・ドイツの制服くらい、軍服というものの神髄にせまった傑作も珍しいようだ。あの不気味に硬質なシルエット。韻を踏んでいるような、死と威嚇の詩句のリフレイン。実戦用の機能を、いささかも損うことなく、しかも完全に美学的要求を満足させている。

もっとも軍隊というやつは、本来国家権力を支える背骨なのだから、その美学が権力の示威に熱心だからといって、べつだん驚くにはあたらない。しかし、近代的な軍隊の場合、急激な火器の発達が、古典的な警戒色型軍服の影をひそめさせ、かわって実戦本位の保護色的デザインの進出をうながしたという事情がある。さらに、その美学についても、近代国家の偽善に見合ったいかにも散文的な装いが求められはじめたのである。「王」の軍隊には、それにふさわしい虚飾と誇張の軍服を、「近代国家」の軍隊には、それにふさわしい実務的な制服をというわけだ。じっさい、戦力ゼロにひとしいバチカン衛兵の華麗な軍装にくらべたとき、世界最強を誇るアメリカ軍の制服でさえ、まるで作業着を思わせるほどのそっけなさである。現代の軍服の進化と、美学的完成度とは、互いに逆比例するものだという法則をつい立ててみたくなるほど、この散文化はいまや一般的な傾向になっているのである。

では、ナチスの制服の場合、あれほど見事な示威効果をあげるために、一体どんな工夫がこらしてあったのだろう。ガラガラ蛇の尻尾の瘤か、それともライオンのたてがみか。いずれ量産型の制服なのだから、そう演出効果ばかりをねらった、無駄や誇張が許されるはずもない。総勢わずか百名のバチカン衛兵——今なおミケランジェロのデザインになる軍服が使用されているという——などとはわけが違うのだ。機能の重視という点では、最近のアメリカ式軍装とくらべても、おそらく一歩もひけを取るものではないだろう。鉄かぶとの裾のあたりに、多少プロシャ軍風の名残が感じられなくもないが、それだって視界を損わずに、じゅうぶん頭部を保護するのがねらいだと思えば、どうしてなかなか合理的な形体なのである。

にもかかわらず、アメリカ式の作業服スタイルとの差異は、一見して誰の目にも分る、はっきりしたものだ。もっとも、その相違を、量的に言い現わせと言われてもむつかしい。ケニヤの草原の戦士の、頭の羽飾りのように、本質よりもむしろ属性に表現の重点を置く警戒色型の衣裳ならいざ知らず、機能本位の制服（のみならず工作物一般を含めて）は、油が水をはじくように、既成の形容句をはじき返してしまうからだ。たとえば、風洞実験によって決定された最新型超音速機のデザインを、過不足なく表現しうる形容詞がありえないようなものである。自分で自分を形容する以外には、どんな形容も不可能な、まったく新しい形容詞の原型そのものなのだ。どうやら、ナチスの制服についても、それがナチス風であるというよりほかに、適切な言いまわしなど無さそうにも思われる。

だが、アメリカの制服について、それをアメリカ風だと言う場合とは、文脈はそっくり同じでも、何処かちょっぴり、ニュアンスに違いがあるような気もするのだが……

現代の軍服を代表する、アメリカ式デザインの散文性は、前にもふれたとおり、一見作業着を思わせるその機能主義にある。しかし、意地悪く勘繰ってみると、その「一見作業着を思わせる」というあたりに、かえって何か意図めいたものを感じられなくもない。ナチスの制服が、一見何的でもなく、純粋に制服的だったのにくらべると、目立って日常性が強調されすぎている。

作業着の定義は単純である。とにかく実用に徹することだ。しかし現代の職種は種々雑多であり、それに応じて作業着のデザインも、多種多様にならざるを得ない。能率、安全、低価格、といった条件さえ満たされれば、とくに作業着固有のデザインが考案されなければならない必然性は何もない。作業着のイメージを左右するものとしては、むしろ好みや習慣の方が、はるかに大きいはずだ。けっきょく一種の日常感覚なのである。日常感覚のスクリーンに投影された、労働のイメージなのである。

つまり、アメリカの軍服は、機能主義の名をかりて、その中にアメリカ人の日常感覚をこっそりしのび込ませた、じつに巧妙なデザインだと言えそうだ。いかにも「近代国家」の偽善性にふさわしい、仮面の軍服なのである。ケニヤ戦士の羽飾りとは逆の意味で、アメリカの軍服の散文性も、軍服の本質というよりは、むしろ本質を覆い隠すための属性かもしれないのである。ある種の歌手が、民衆性を誇張するために、わざと声帯をつぶして声をにごらせるよ

うに……

それにくらべると、ナチスの制服は、そうした一切の偽善をかなぐり捨てた、純粋制服だったと言えるだろう。まさに日常性の拒否が、あのデザインの特色である。現代では、すべての現実が、国家という構造に即して、生産され、消費される。したがって個人に日常性を保証するのも国家なら、それを取上げ、回収してしまえるのもやはり国家なのだ。原理として、民主国家では、個人の運命と国家の同一視を否定はしているが、こと軍隊に関する限り例外とみなされるらしい。法律でさえ、一般市民とは別のあつかいを受けるのだ。つまり、良き兵士は、国家に直属すべく、彼の市民的日常を放棄しなければならないのである。だとすれば、真に軍服らしい軍服が、日常性からの断絶であるのは当然のことだし、国家権力の意志表示を臆面なくさらけ出すものであっても、なんら不思議はないはずだ。そして、航空機の風洞実験の成果が、ほとんど常に美学的感興をよびさますように、ナチスの純粋軍服がそれなりの美学的効果を発揮したのも、じつに理にかなったことだと言わなければなるまい。まさに百パーセント兵士の軍服だったわけである。

いまぼくの手許に、二枚の写真がある。一枚は、スターリングラードに突入寸前の、ナチスの兵士たち数人の姿。ある者は片膝をついた姿勢で、自動小銃のねらいを定め、別の者は上体を浮かせて、半壊した建物の割れ目に手榴弾を投げ込んだところらしい。薄い冬の日差しが、彼等の鉄かぶとをにぶく光らせ、ほこりだらけの服の皺をしめっぽく引きつらせている。おそらく疲労の極限にあるにちがいない。しかしまぎれもない、ナチス・ドイツの兵士たちなのだ。彼等は、その写真の中で、場数を踏んだ俳優たちのように、いつまでもじっとナチスの軍服にふさわしい役割を正確に演じつづけている。

さて、もう一枚は、たぶんそれから数カ月後の写真。場所は違うが、やはり壊れた建物の間から、こちらに向って歩いてくる二人のナチスの兵士たち。一人は、両手を頭の上に組み、数歩おくれてもう一人が、白いハンカチを顔の前にかざしながら、おずおずとした足取でカメラの方にやってくる。カメラの手前にいるのは、たぶん赤軍の兵士だろう。つまり彼等は、降服したナチスの兵士なのだ。いや、もっと正確にいえば、ついさっきナチスの兵士であることを止めた、二人のドイツ人なのである。

この二枚の写真の間にあるものは、しかし、単に数カ月

の距離だけではない。その間に起きた兵士たちの変化は、なんとも印象的なものである。まるで、楽屋に戻った俳優が、化粧といっしょに、扮していた役柄まで洗い落してしまった後のような、生々しい素顔。ぼくはその素顔に意表をつかれてしまう。ナチスの兵士を、兵士でなくしたものは、おびえでもなければ、虚脱でもなく、じつにその素顔のせいだったのだ。一人はどこかのドイツの片田舎の農夫の息子といった感じの、実直そうな青年。いま一人の顔はよく見えないが、たぶん見習工かなにかだろう。とつぜん舞い戻ってきた、日常の素顔に、制服のほうがとまどい、まごついている。化粧を落した俳優に、ハムレットの衣裳がそらぞらしいのと同じことである。

と言うことは、同時に、ナチスの制服が、いかに完璧に彼等の素顔を消し去り、日常を拭い去っていたかの、証拠にもなるだろう。敗北が彼等から奪ったのは、単なる闘志や戦意だけではなかったのだ。彼等が奪われたのは、まさに制服の意味であり、制服の思想であり、制服を制服たらしめていた、国家そのものだったのである。

この二枚の写真は、ある軍服の死についての、貴重な記録というべきだろう。それはまた、一つの国家の死の記録でもある。動物の死の兆候が、まず心臓にあらわれるように、国家の死の兆候は、こんなふうにして軍服の上にあらわれるのかもしれない。

そしておそらく、この国家と軍服の関係は、なにもナチス・ドイツだけに限られた、特殊事情というわけではないだろう。程度の差こそあれ、国家と軍隊の関係には、ある普遍的な法則があるはずだ。木造だろうと、鉄筋コンクリート造りだろうと、牢獄だろうと、宮殿だろうと、建造物はいずれ建造物であるように、社会体制や国情に違いはあっても、国家が国家である以上、なんらかの共通項があるはずである。そして、軍隊というものが、その国家権力によって、日常性から隔離された武装集団であることを考えれば、民兵やゲリラ部隊でないかぎり、あらゆる軍服が、いずれはこの二枚目の写真のように死んで行くにちがいないのだ。さもなければ、一枚目の写真のように、生きつづけていくかである。生きる以上は、そのどこかに、大なり小なり美学的衝動をひそませながら。

いくら作業服スタイルで、日常性に寛大なふりをしてみせたところで、組合の結成を認めた軍隊の話はまだ聞いたこともないし、勲章を廃止した軍隊の話も聞いたことがない。国家が国家であるかぎり、軍服に求められるものは、結局より良き軍服ということらしいのだ。だから、兵士の

服装を口やかましく監視することが、どこの軍隊においても、つねに軍曹殿の重要な役目の一つになるわけである。

ところで、ミリタリィ・ルックなるものの流行の噂を耳にしたのは、たしか数年前のことだ。率直に言って、苦々しい思いを隠すことが出来なかった。これ見よがしの週刊誌の記事によれば、あるデパートの一角には、ミリタリィ・ルック専用のコーナーまでがもうけられ、ナチスの鉤十字の腕章などが、人気の的だという。なるほど、ナチス亡き後、あれほど純粋な美学的軍服は、すっかり跡を絶ってしまった。軍事力そのものは、はるかに強大になりながら、政治的配慮のせいか、どの軍服もひどく遠慮勝ちである。そんな偽善への反撥が、より純粋な軍服へと、苛立った青年たちの心情をかりたてたのだろうか。

青年に反抗がつきものであるくらい、百も承知のことである。不満だから反抗するのではなく、反抗するために、不満の種を見付けだすと言ってもいいくらいのものだ。それは青年期に特有な、一種の落伍者意識に由来するものだろう。落伍者意識というと、聞えが悪いが、べつに否定的な意味合はなく、しだいに自覚されてくる自分と世界との関係へのおびえであり、自分の可能性を客体化しながら拡大していくためにも不可欠な感受性のことでもある。完成をよそおっている既成の秩序に対する疑惑であり、異和感であり、正統よりも異端にアンテナを向けることで、社会の燃料補助タンクの役割を果すことにもなるわけだ。青年の未来が無限定なものである以上、その反抗が「理由なき反抗」であっても、とくに不思議というほどのことはない。

だから、ぼくが苦々しく思ったのは、なにもミリタリィ・ルックの流行そのものに対してではなく、鉤十字の腕章で象徴されるような、美学的軍服が、あたかも現代における異端であり、青年の反抗心をくすぐる旗印になりうるかのような、馬鹿気た錯覚を植えつけた世間の側に対してだったのだ。ミリタリィ・ルックが流行する以上、怒れる若者たちの目には、平和が現代の大勢を支配している正統派として映っていたということになる。

なるほど、そう考えてみると、最近のいわゆる進歩派の論調には、たしかに平和の正統性にあぐらをかいてしまった嫌いがある。そして、それに呼応するかのように、保守派の論客たちが、少数派めかした悲劇的なポーズで遠吠えをしてみせるのだ。その両方をつき合わせてみると、ちょうどうまい具合に、一枚の絵になってくれる。現状を支えているのが、平和勢力という多数派であり、その隙をうか

がっているのが、痩せさらばえた数頭の狼だと言わんばかりの、ポンチ絵が。

もしそれが事実だとしたら、ミリタリィ・ルックも大いにけっこうだろう。なんであろうと、あぐらをかいた正統派には、ゆさぶりをかけてやる必要がある。それに、彼等が反抗しているのは、いずれ「平和」の概念に対してであって、平和そのものに対してであるはずがない。反抗とはもともと、無力の自覚であり、その矛先もせいぜい概念どまりがおちなのだ。反抗左翼が保守権力にとって、無害であるのと同様に、反抗右翼も、さして実害はともなわないはずである。

だが、現在、果して平和にどれほどの正統性が約束されているだろう。なるほど戦争がそれ自体で肯定される事態は、もう終ったようでもある。もし、戦争のための戦争という主張でもあるなら、それはたしかに異端の名に価いするかもしれない。しかし、必要悪としての戦争なら、現代はもううんざりするほど、その破壊の食卓に坐りっぱなしなのだ。日本はたまたま、直接火薬の臭いをかがずにすませた、例外的な国の一つであるというにすぎない。平和のための戦争。戦争の口実としての、平和の正統性。額面ばかり大きくて、決済の日付は書き忘れたままの、あてにならない長期手形。皮肉なことだが、平和の正統性が、同時に戦争の正統性の裏付にもなっているというのが現実なのである。

仮に明日、ベトナムの戦争が終って、地上で戦火に倒れる者が一人もいない日が来たとしても、その平和は、けっきょく休戦の別名にしかすぎないのだ。さらにその平和が、そのまま十年つづいてくれたとしても、おそらく長い休戦以上のものではありえまい。ミリタリィ・ルックが反抗になりうるような条件は、あいにくまだ何処にも見当らないはずなのである。

そのせいかどうか、けっきょくミリタリィ・ルックは、大した流行もみないうちに、どこかに消えてしまった。一説によると、日本では、ちょうどツイッギーのミニ・スカート旋風に押しまくられ、流行のチャンスをとり逃したのだそうだ。しかしそれは女性の流行の話だろう。ぼくが問題にしているのは、男の流行の方なのだ。もっとも最近の流行メーカーたちは、男と女の区別にあまりこだわらず、コミで作戦を立てる傾向だそうだから、別々に考える方が世間知らずなのかもしれない。いずれにしても、案ずるほどのこともなくミリタリィ・ルックの流行は、掛け声もそこそこにして、さっさと退散してくれたようだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo